



卒業をひかえて思うこと

大阪府立箕面支援学校

川崎 佳世

息子の峻生(りょうせい)はこの春、箕面支援学校の高等部を卒業します。
高等部を卒業される先輩方はみな、誇らしく晴れ晴れとした顔をされていました。
そんな時が我が子にやってくるとは、月日の流れの速さを感じます。今まで多くの方に支えられながら、息子は自分らしく成長してきました。
今までの歩みを少し振り返りたいと思います。

息子はダウン症です。告知を受けた時には出産した嬉しさが大きかった分、今までに感じたことがない位辛く悲しかった事を覚えています。その時はダウン症児の未来なんて想像もできませんでした。幸いに心臓など大きな合併症がなかったため、医師からは体は弱いが普通に育てたら大丈夫と言われました。しかしその言葉は空々しく聞こえ、他の赤ちゃんを見ては自分だけが不幸で、どう頑張っても他の子の様に成長していくことはないのだと感じ、周りから心を閉ざしていました。

しかし生後4か月を過ぎたころ、初めてふっと笑ったのです。その顔はお地藏様のように生まれてから初めて感じた嬉しい瞬間でした。

その頃から親子で通所し療育を受け始めました。就学前の子どもたちと親子一緒にいる中で友だちが増え、色々な個性を持つ子がいると知りました。自分の持っていた「普通」や「一般的」という概念は意味を成さず、その考えが自分自身を縛り、我が子をありのままに受け入れると頭で考えても自分が障がいへの偏見を持っていたと思いました。

保育所では言葉でのコミュニケーションが難しく一人では何もできないという私の心配をよそに、周りのお友だちの甲斐甲斐しいお手伝いや、先生のサポートのお陰で保育所生活を満喫し、さらに息子の世界は広がっているようでした。小学校は地域の学校に通いました。小学校では保育所と違い大きな集団生活となります。

入学してしばらく経ったころ、息子のことをよく知ってもらうために学年の子どもたちに向けてお話しする機会をいただきました。小学1年生でも興味を持ち、理解しやすいように手作りの紙芝居を使って、息子の特性を伝えました。

言葉での意思の疎通が難しい時は、子ども同士でジェスチャーやマカトンサインを使って会話しているのを見かけました。授業ではみんなと同じ課題はできないので、入り込みの支援の先生に付いてもらい別の課題に取り組んでいましたが、時々息子が頑張った成果を担当の先生がみんなに紹介してくれました。日々分け隔てなく息子に接する先生の後姿を子どもたちはよく見ていたと思います。子どもたちは自分たちとは異なる個性を持つ息子を最初不思議に思っていたようで、会うたびに何度も質問されることはありましたが、大人のように障がい児と捉えているように感じませんでした。一緒に学校で生活していると、ありのままの姿の息子をそれが当たり前だというように接してくれました。

息子と友だちとの良好な関係は自然に築かれたのではなく、先生方が普段の生活の中でどんな個性もあつて当たり前ということを言葉や息子への態度でその都度伝えてくれたからだと思います。



マカトンで「一緒に遊ぶ？」と友だちから声を掛けてもらっているところ

中学校は知的校の豊中支援学校に入学しました。ここでは、習慣から身に付けられる事を多く学びました。例えば掃除の学習の時、一人ずつ手順を確認しながら順番に行うので、実際に掃除をするよりも待っている時間のほうが数倍長かったりすることもあります。でも待つということは無駄な時間ではなく、他の人の事を注意して見ることや、すぐにやりたいという気持ちをコントロールする力を育てる意味があります。これは社会の中で生きていくための大切な力となります。息子もその力を少しずつ育んでいくことができました。高等部は、校区割りの関係で箕面支援学校に入学しました。知的校から知肢併置校になり私の一番の心配は、友だちに興味を持つあまりに、医療ケアの器具や身体を支えるための器具などを勝手に触ってしまわないかということでした。通う学校が変わることについては、この先も生きていく中で過ごす場所が変わることがあるだろうし、支援してくださる方が代わることも考えられるので、環境変化の練習と思いました。私が環境の変化を深刻に考えなくてもよかったのは息子が場所や人に対するこだわりが弱かったこともあります。そして中学部から持ち上がって進級した友だちや地域の中学校から入学した友だち、教職員の皆様に温かく迎えてもらったからでしょう。私よりずっと早く新しい環境になじんでいました。かなりお調子者で、自分だけの力で出来ることも少ないですが、環境変化への耐性は息子の大きな強みの一つです。

箕面支援学校では、肢体・知的の生徒が混ざってクラス分けがされています。授業では課題の近い生徒に分かれて学習しますが、ホームルームや給食はクラスで過ごします。入学に際して一番心配していた、勝手に友だちの器具類を触ってしまわないかということは、先生方の指導とフォローのお陰で事なきを得て過ごすことができました。人の名前を覚えるのが苦手な息子が少しずつクラスの友だちの名前を覚えしました。親子ともに大切な友だちが増えてこの学校で高等部を過ごすことができて本当に良かったです。

高等部3年の最後の大きな行事の発表会「もみじフェスタ」では弾ける笑顔でダンスを踊り、学年の友だちと一緒に一つの事を作り上げる嬉しさが溢れ出ているようでした。



「もみじフェスタ」にて
大ブレイクしたダンスを披露

息子が赤ちゃんの時に初めて微笑んだ日から、前を向いて行こうと心に決めても、今日を迎えるまでに私の気持ちが沈んでしまうこともありました。

子どもが何歳になってもその時々で心配は尽きません。これからも人生の岐路で何度も悩むと思います。その時には息子を通じて知り合えた人たちと一つずつ考えていきたいと思います。

私にご縁があってPTA活動に関わらせていただきました。一保護者では知り合えなかった他学部、他学年の保護者の方や教職員の方と知り合うことができました。学校という場所だからこそ子どもの年齢や障がい種別を超えて幅広くネットワークを作れます。悩んだり、落ち込んだり、迷ったときに相談できる、心強い仲間を持つことができたのは大きな財産です。

学校という守られた環境を巣立つことに不安はありますが、今まで積み上げた力を信じ、親子ともに一人ではなく、共に歩む仲間がいることを励みに、これからも楽しみを見つけないで進んでいきたいです。

峻生(りょうせい)に関わってくれた全ての方々と、その出会いをもたらしてくれた峻生(りょうせい)に感謝して。